

エラ・シャープ紹介：英国初期フロイト派分析家の臨床的技量：モーリス・ウィーラン編『思考の女主人』第1章「エラ・シャープとは何者か」、および、エラ・シャープ『ドリーム・アナリシス』第7章「精神的・身体的危機において生じる夢の例」
翻訳

著者	松本 由起子
雑誌名	北海道医療大学心理科学部研究紀要
号	8
ページ	43-57
発行年	2012
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00006123/

《その他》

エラ・シャープ紹介： 英国初期フロイト派分析家の臨床的技量

モーリス・ウィーラン編『思考の女主人』第1章「エラ・シャープとは何者か」、および、エラ・シャープ『ドリーム・アナリシス』第7章「精神的・身体的危機において生じる夢の例」 翻訳

松本由起子

An Introduction to Ella Sharpe: An Early British Freudian Analyst's Practical Skills

Through the translations of Maurice Whelan's 'Who was Ella Sharpe?' from *Mistress of Her Own Thoughts*, Rebus Press, London, 2000, Chapter One, and Ella Sharpe's *Dream Analysis*, Karnac, London, 1988, Chapter Seven.

Yukiko MATSUMOTO

Abstract : This introduction to a little known early British Freudian analyst, Ella Sharpe (1875-1947), mainly consists of two translations: (1) Chapter One of Maurice Whelan's (ed.) *Mistress of Her Own Thoughts*; (2) Chapter Seven of Ella Sharpe's *Dream Analysis*. While (1) outlines Sharpe's originality and lasting contribution to the later psychoanalysis in general and in Britain, (2) shows us examples of practical competence and techniques of the early Freudian analyst facing clients' critical moments. How a dream could be interpreted by psychoanalytic techniques built on the Freudian dream theory but also be used for clinical assessment considering Clients' past and present circumstances as well as the phase of an analysis they were in testifies practicality and actuality of Sharpe's approach.

Key words : フロイト派精神分析 (Freudian Psycho-analysis)、夢分析 (dream analysis)、危機的な状況における夢 (dreams in crises)

エラ・フリーマン・シャープ Ella Freeman Sharpe (1875-1947) は、日本ではほとんど知られていない英国のフロイト派精神分析家である。精神分析や哲学に関心のあるひとだと、ラカンが無意識と言語の関係を論じた先駆者として言及したことで名前を知っているかもしれないというところだろう。だがシャープが精神分析家訓練生を対象におこなった講義を元に 1937 年に出版した *Dream Analysis: A Practical Handbook for Psychoanalysts* 『ドリーム・アナリシス 精神分析家向け実践ハンドブック』(以下『ドリーム・アナリシス』と表記) は、本国では今日に至るま

で版を重ね続けている夢分析の名マニュアルであり、1990 年代に筆者がロンドンのタビストック・クリニックで精神分析を学んだ際にも必読とされていた。診療的実用性という意味では、フロイトの『夢判断／夢解釈』を上回るこのマニュアルの明晰さは、シャープ特有の臨床例の豊かな記述に加えて、英文学畑出身で幼児期からシェイクスピアなどを聞いて育ち、長じてはそらんじていたというほど文学・韻文に通じていたシャープのようなひとでなければ不可能だっただろう、夢の文法と修辞法・詩的語法の類似性、という以上に相同性をめぐる洞察からもたらされている。

したがって『ドリーム・アナリシス』の核は、詩的語法と夢の文法の相同性についての観察と分析が、多数の実例をもって示される第2章だと言える。ただ、そこはフロイトの夢理論、いわゆる夢の作業／夢工作／夢の仕事 (dream-works) の大枠での理解が前提となっており、そのうえにシャープが韻文的語法への並外れた感度の高さをもち、臨牀を重ねた中で見いだした実践的読解方法を積み上げ、実例をもって読者を納得させるという章であるため、臨牀経験を持つだけでなく、精神分析にもある程度興味のある読者でないと、おそらくおもしろみを感じにくい。そこで今回は、非・精神分析的にも興味深いと思われる第7章「精神的・身体的危機において生じる夢の例」を御紹介する。臨牀家シャープが訓練生に向けて惜しみなく語る知見は、今日の臨牀にもそのまま通用するアクチュアリティを持ち、それがシャープの高い言語能力にもとづく的確な表現で受講者に高密度で伝えられるさまは、読んでいて心地よく、また教師としての臨牀家にはこうあってほしいと臨牀を学ぶひとなら思うだろうものだ。

しかしその前に、1875年という後期ヴィクトリア朝に生まれた中産階級の一女性、つまり多彩なヒステリー症状と知的な語りによってフロイトを精神分析へと向かわせたウイーンの中上流階級の女性たちと、世代や立場においてそれほど遠く離れていない女性が、教員としての安定したキャリアを築いていた四十代に至って精神分析に足を踏み入れ、分析家になり、メラニー・クライン等、よく知られる同世代の分析家たちのだれより多くの分析家を育て、精神分析史に残る夢分析マニュアルを残すに至った経緯を、モーリス・ウィーランによるすぐれた紹介で見ておこう。

【翻訳】

第1章 エラ・シャープとは何者か

モーリス・ウィーラン

Maurice Whelan, 'Who Was Ella Sharpe?',
Mistress of Her Own Thoughts,
edited by Whelan, Rebus Press, London, 2000,
Chapter One.

精神分析史の中で、才能ある熟練の臨牀家が精神分析のテクニックについて自身の見解を記すというのは滅多にないことだ。フロイトは1911年から1915年にかけて発表した6本の論文に、テクニックに関する自説の概要を記した。次にそれをやったのがエラ・シャープで、1930年から1931年にかけて国際精神分析学会誌 (*The International Journal of Psycho-Analysis*) に発表された7本の論文においてである。シャープは1920年代から1947年に亡くなるまで、英国精神分析協会で影響力を持った会員であり、死後もその名は重んじられ、よく知られていた。最近でこそほとんど言及されないが、シャープの影響は英国の精神分析をかたちづくっているのである。

エラ・シャープの魅力は読めば一目瞭然である。シャープには精神分析関係の文章ではまず見ることのできない正面性があり虚心坦懐だ。自分がおこなった臨牀についての隠し立てのなさといい、自身の頭の働かせ方を見るよう読者を招き入れるさまといい、拍子抜けするほど率直なのだ。優れた文体の散文を使いこなし、教えるという技術^{アート}を熟知してもいた。シャープは自分の頭と自分自身とをひらめきに満ちた使い方をしているうちに、逆転移 (counter-transference) という問題について、ハイマン、ウィニコット、ラッカーが概念として理論的見取り図に載せるのに二十年先立って理解していた。また文学の素養、特に叙情詩の詩的語法に関する知識を通じて、言語の重要性と無意識の文法について、ラカンの一世代前に記してもいた。

シャープが常にテクニックに興味を持ち続けた理由は、テクニックをめぐる最初の論文 (本書第

3章)に記されている。根本的に、シャープは精神分析という科学を、臨床にあたる分析家の実践上の活動から展開し続けるものと見做していたのである。「精神分析は、そのテクニックがアートであることをやめたとき、生きた科学であることもやめてしまう」、そして「精神分析的な知の総体は、技術的スキルの増加にともなうて増えていくのであって、思弁的狡猾をもって増やせるものではない」(p. 44)とシャープは言い切っている。

そうしてやむことなくテクニックを問いつけたシャープだが、その関心に導かれて精神分析の実践をはるかに超え、日常的臨床を支える理論や概念の奥深くにまで踏み入ることになった。シャープの全著作の説明は本書の期すところではないが、詩人フランシス・トムソンに関する複数の論文や(Sharpe 1925a¹)、シェイクスピアをめぐるさまざまな著作は(Sharpe 1929², 1946a³)、シャープが文学者の精神に痛切な関心を寄せていたことを示している。シャープはウィリアム・シェイクスピアの戯曲について、敬虔な牧師が聖書を知るように知っていたと言われ、実際、最後に病床で書いていたのもシェイクスピア劇をめぐる大著であった。他にシャープが筆をふるった方面は、視覚芸術、美学、想像力、創造性、メタファー、象徴である。全著作目録(巻末付録)を見れば、シャープの関心と才能のありようがある程度わかるだろう。

本書ではシャープによるテクニックをめぐる7本の論文(本書第2章)に次いで、第3章でシャープの思考に大きく影響された現代の分析家による5本の書き下ろしエッセイを紹介する。シャープ本人の提示方式にのっとって、各寄稿者は自分の患者とのあいだで生じたことを詳細に語るように求められた。書き手が読者を信頼し、分析家と患者のあいだで展開された状況に踏み込ませることを必要とするアプローチである。読者は、分析家の相談室と分析家の頭を「客」として訪れるにあたって、敬意ある想像力をたずさえ、研究者としての批判的かつ誠実な態度を求められるだろう。エラ・シャープはそのような信頼を期して書いて

いたのであり、本書寄稿の分析家もまた読者に同じ要求をすることになる。

フロイトの精神分析に関する著作は24巻にもものぼるが、分析的テクニックについてはごくわずかしき記しておらず、1915年を最後にフロイトはこの問題に体系的に取り組むことはなかった。この方面についてのフロイト晩年の見解は、1928年のフェレンツィ宛の手紙に垣間みることができる。フェレンツィが自身の論文「精神分析技法の柔軟性」(1928)の草稿を送ったのに対して、フロイトはこう返信した。

この論文の題名は非常に秀逸ですし、もっと使い出があるのではないのでしょうか。というのも私自身が当時、技法に関して述べた忠告はどれも…基本的に否定的なものだったからです。いちばん大切なのは、分析家はなにをしてはいけないのかを強調し、分析に逆行するような誘惑を指摘しておくことだと思っています。分析家がいい意味でやるべきことは、ほぼすべて、君が紹介してくれた「コツ」に任せることにして。その結果、私が成し遂げたことといえば、ただただ従順な分析家たちが、まるでタブーでもあるかのように私の忠告に盲従し、その忠告の持つ柔軟性には気づかないという事態だったわけです(Grubrich-Simitis 1986:271⁴)。

エラ・シャープはフロイトとはまったく対照的に、1920年代、英国精神分析協会での訓練生対

1 Sharpe, E. F. (1925a) 'Francis Thompson: a psychoanalytic study', *British Journal of Medical Psychology* 5: 329-344.

2 Sharpe, E. F. (1929) 'The impatience of Hamlet', *International Journal of Psycho-Analysis* 10: 270-279.

3 Sharpe, E. F. (1946a) 'From *King Lear* To *The Tempest*', *International Journal of Psycho-Analysis* 27: 19-30.

4 Grubrich-Simitis, I. (1986) 'Six letters of Sigmund Freud and Sándor Ferenczi on the inter-relationship of psychoanalytic theory and technique', *International Review of Psycho-Analysis* 13: 259-277.

象の講義の中で、テクニックに関する自説を体系的に展開した。その講義をベースにした7本の技法論は、分析家訓練生にとっても経験豊かな分析家にとっても、いまだはかり知れない価値を持つ。シャープの技法論は、フロイトの忠告のうえに築かれたものだが、フロイトの言葉を借りれば「いい意味で」分析家がなすべきあらゆることについても詳細に述べている。コツや柔軟性もまた、シャープのアプローチにおいては中心的概念だったのである。

私の見るかぎり、フロイトが実践に関して作り出した最も重要なものは、精神分析式のセッティングであった。二人のひとのあいだに精神分析という新たな関係のかたちを作り出したことによって、フロイトは以降の精神分析家がそれぞれの元に持ち帰り、探求しうる場を提供したのである。シャープは一方「ただただ従順なひとびと」と横並びになろうというのではなく、この新たな空間、この新しい関係性のうちに、シャープ独自の個性・感性・精神を持って入っていった。シャープが論文の中でわれわれに語るのは、患者たちとのこの新たな関係性のうちにあつての自身の経験に拠ってである。この特質が、シャープの文章に鮮度と明晰さを与えているのであり、それはアーネスト・ジョーンズにこう言わしめた。「シャープが特有の鮮明さと繊細さをもって聴衆に伝えることができたのは、問題になっている患者の人柄のみならず、患者の心理的問題を解き明かすためにごくかすかな手がかりまでも辿っていくシャープ特有の接近度ゆえである」(Sharpe 1950: v⁵)。フロイト同様、シャープもテクニックの問題にやむことなく関心を抱いていた。シャープの著書『ドリーム・アナリシス』(1937a⁶)は、夢の本質をめぐる新たな知見とは別に、7本の技法論とセットで読むこともできる。『ドリーム・アナリシス』の中の一章は、ある患者との一回のセッションの完全な記述になっており、そこで交わされた実際の会話の詳細まで含んでいる。これは当時としては異例の提示法であった。シャープは亡くなったときにも、テクニックに関する新しい著書に取り

組んでいた。第1章までしか仕上げることはできなかったが。

エラ・シャープはイングランド、ケンブリッジの近くで1875年に生まれた。ノッティンガム大学で文学、演劇、詩を学び、オックスフォードの大学院で研究するつもりでいたが、父親が亡くなり、母や妹たちの生活を支えるために職を探さざるを得なくなった。シャープはノッディンガムシャーの炭田地帯にある小さな貧しい町ハックナルの師範学校の副校長に任命され、1916年まで勤めた。シャープには接することになった学生の人生に入っていく直感的力があつたようで、副校長として勤めた12年間に、学生の多くに忘れられない印象を残している。シルビア・ペインによるシャープの追悼記事には次のようにある。

彼女が人生のこの時期にしていた仕事の性質や価値は、死後、かつての教え子から寄せられた数多くの手紙の中で示されています。多くは三、四十年、彼女と会うこともなかった学生からの手紙です。ある経済学の教授は次のように書いておいでです。「私の今の悲しみの深さは、先生が四十年前に亡くなられていたらそうであつたであろう悲しみと変わりません。あの頃のことは、どんなに小さなことも、私の中では昨日のことと変わらない鮮やかさなのです。シャープ先生は、私の記憶の中でも私の人生の中でも独特の位置を占めておられました。先生はいつもそこにいらしたのです」(Payne 1947:54⁷)

1912年、アーネスト・ジョーンズは英語による最初の精神分析の本を記し、翌13年、ロンドン精神分析協会を設立した。ひとの状態を扱うこ

5 Sharpe, E. F. (1950) *Collected Papers on Psycho-Analysis*, London: Hogarth.

6 Sharpe, E. F. (1937a) *Dream Analysis*, London: Hogarth.

7 Payne, S. (1947) 'Obituary: Ella Freeman Sharpe', *International Journal of Psycho-Analysis* 28: 54-56.

の若い科学に向けられたエラ・シャープの関心は、文学への関心からおのずと導かれたものだった。1917年、43歳にしてシャープはロンドンに移り住み、ブランズウィック・スクエアにある医学心理学クリニックで学ぶことにした。ジェイムズ・グローヴァーとの個人分析の時期を経て、ジョーンズが1919年にロンドン協会を解散し英国協会を設立すると、シャープは分析を受けに大陸ヨーロッパへと向かった英国初期の分析家たちの足跡にならうことを決意する。シャープはハンス・ザックスの分析を受けようとベルリンに旅立った。1921年、シャープは英国協会の準会員になり、二年後には正会員となる。教育分析を受けることが規定の要件になるのは1925年のことだが、シャープは継続的自己分析を分析家としての人生と仕事の中核と見做しており、長年、夏休みにはベルリンのザックスの元に戻り個人分析を続けた。

シャープの分析家であるハンス・ザックスは、医学や精神科学の経歴を持たない分析家として臨床をはじめた最初の一群に属する。もともとは法律家で、1911年頃、ウィーン精神分析協会のメンバーになった。長年、研究会には出ていたが、精神分析家として実践をはじめたのは第一次大戦後、ベルリンに移ってアレグザンダー・ランブル、シルビア・ペイン、バーバラ・ロウの分析家になったときである。シャープ同様、ザックスは文学と芸術を深く愛し、創造的な精神の活動に飽くことなく関心を抱いていた。ザックスの『創造的無意識』(*The Creative Unconscious*)(Sachs 1951⁸)はこの分野の古典であるが、シャープが美学や創造性や想像力をめぐって自身の思想を展開するにあたって、影響を与えていることは間違いない。

イングランドの田舎の炭坑地帯から出てきた中年のオールドミス〔訳注：原文 *spinster*。中世では職業的に「女の紡ぎ手」を指したが、16世紀後半、法的に「未婚婦人」を指すようになり、やがて法の中立的意味を離れ「中年以降の生涯未婚女性」を、さらに18世紀以降は侮辱的ニュアンスを加えて指すようになった語として、和製

英語の「オールドスミス」に相当する。Amy M. Froide, *Never Married - Singlewomen in Early Modern England*, Oxford University Press, 2005 参照]が、いったいどうやってロンドンで精神分析をする道を見いだしたのだろうか、そう疑問に思うこともできなくはないだろう。シャープをめぐるこの劇的な変化については情報が欠けているが、ある程度の推測は可能だ。まず十分に安定した家庭生活が独立心と冒険心をもたらしていたことは間違いない。副校長という地位を、同じ立場の男の同僚と並んで、師範学校で、1904年の段階で、29歳という年齢で獲得するというのは、そうそうあることではない。副校長としてのシャープは、その威信と思春期の学生たちの問題へと分け入っていく並外れた能力とを結びつけていた。また、シャープの知的生活は、偉大な文学作品を読みかつ教えることによって、ちょうど若き日のフロイトが大作家の影響を受けたのと同じように、滋養を与えられ豊かなものになっていただろう。1916年のハックナルからロンドンへの上京は、われわれにはきわめて大きな移動のように思えるが、おそらくシャープほどの才能と落ち着きを持った女性にとってみれば、文学から精神分析へのこの移動は、道を一本渡る程度のものだったのだろう。たとえばブルームズベリー・グループの活動も、このふたつの分野への関心を結びつけていたのがシャープだけでなかったことを示している。ただ、ブルームズベリー・グループは、シャープの個人的な趣味からすれば、ボヘミアンにすぎたであろうが。

エラ・シャープは徹底的な関与と傾倒という能力を、分析家としてのキャリアにそのまま持ち込んだ。ペインは1928年にオックスフォードで開かれた会議での講演(Sharpe 1930a⁹)の様子をこ

8 Sachs, H. (1951) *The Creative Unconscious*, Cambridge, MA: Sci-Art Publishers.

9 Sharpe, E. F. (1930a) 'Certain aspects of sublimation and delusion', *International Journal of Psycho-Analysis* 11: 12-23.

う伝えている。

エラ・シャープの外見と人柄は、発表している論文と切り離しえないものでした。シャープはなにも邪魔するものがなければ偉大な女優になることもできたでしょう。この講演のときは、優しいれんが色のドレスを着ていて、暗い色の髪、暗い色の眼、かなり浅黒い肌が、あたたかな色合いでやわらげられていました。彼女は緊張していました。というのも彼女にとっての論文とは、知的コミュニケーションではなく、今まさに生み出そうとしている生き物だからなのです。シャープの手はよく動き、当時はほっそりしていて、まるで電気がかよっているかのように生き生きとしていました。聴衆の中には、エラ・シャープの論文発表には全人格と身体が関与しているので聞き苦しいというひとみいるのは承知しています。シャープにはまったく自意識がないのです。ぱっと見ただけのひとは、シャープは神経質だと言うかもしれませんが。しかしシャープが一見神経質に見えるのは、今、起こっている出来事が、彼女にとって重要であるがゆえに生じる緊張のためで、批判が怖いだとか、論文の内容に確信を欠くからではないのです。(Payne 1947: 55¹⁰)

1940年代に英国協会内部で深刻な問題が生じたとき、いわゆる大論争(Controversial Discussions)〔訳注：英国精神分析協会の科学的会議(Scientific Meetings)を舞台に繰り広げられた、アナ・フロイト派とメラニー・クライン派が対立しての内紛〕が、単に「科学的」見解の相違によるものではないと最初に見抜いたひとりがエラ・シャープであった。シャープはこの件をめぐる組織の力動、ことにかつて自分を分析したひとに対して生じうる忠誠心を見てとり、未解決の転移(transference)が、この学識高い協会の存続をいかに脅かしうるかを察知したのである。シャープは分析家とのあいだに英仏海峡が横たわって

いた自分たちの世代の特権について触れている(King & Steiner 1991: 646¹¹)。そしてなによりも、精神分析をめぐる生産的な議論がおこなわれうるのは、民主的かつ思考の自由が真に尊重される場でしかありえないということをシャープは認識していた。

シャープの影響力のほどは、1942年に英国精神分析協会がおこなった調査に見ることができ。大論争のさなか、メラニー・クラインとその協力者たちが訓練生に対して発揮される影響力を通じて英国協会を乗っ取るのではないかとの不安が生じており、調査はその不安に現実的基盤があるかどうかを調べるためのものだった。しかし蓋を開けてみれば、1942年までの15年間で、教育分析(12件)、スーパーヴィジョン(15件)ともに誰より多くやっていたのはエラ・シャープだったのである。一方、メラニー・クラインは教育分析4件、スーパーヴィジョン9件であった(King & Steiner 1991¹²)。

エラ・シャープは、英国協会がジョーンズのもとで自らを定義し直そうとしていた時期に協会に入った。当時、ジョーンズは英国精神分析協会会長という25年にも渡って維持することになる地位にあっただけでなく、国際精神分析協会の会長でもあった。国際精神分析誌の創刊は1920年だが、当時の編集担当はジョーンズである。さらに1924年、ジョーンズはレオナード・ウルフのホガース・プレスと提携し、26年にはジョーンズを初代院長として、通常料金を払えないひとのためにロンドン精神分析クリニックが開設される。

エラ・シャープは英国協会の訓練委員会と評議委員会に入っており、精神分析研究所の理事をしていた。副校長をしていたシャープのキャリアを思えば、運営に関わる重要な地位になぜもっとできなかったのかと疑問に思えなくもない。その答

10 'Obituary: Ella Freeman Sharpe', *International Journal of Psycho-Analysis* 28: 54-56.

11 King, P. & Steiner, R. (1991) *The Freud-Klein Controversies 1941-1945*, London: Routledge.

12 King, P. & Steiner, R. (1991) *The Freud-Klein Controversies 1941-1945*, London: Routledge.

は、ひとつには、シャープが医師資格を持たない分析家だったことにある。英国精神分析協会が会長として初めて医師ではない分析家を選んだのは1982年になってのことだ。しかしシャープに関してさらに大きかったのは、ジョーンズが英国協会で管理的締め付けをおこなっていたことであった。ジョーンズは「貴族的リーダーシップ」の信奉者を自認していた。ジョーンズの血管には王家の血が流れていたと！ それはともかく、この事態は大論争へと至る不和を招いた中心的理由のひとつだった。ジョーンズによる支配は、多くが誤った配置だと感じていただけでなく、エドワード・グローヴァーを後継者に仕立てようとの意図が明白なものでもあった。したがって会員たちには、今後何十年にも渡って独裁的支配が続くのが眼に見えていたのである。

科学的には、ジョーンズははるかにオープンであった。ジョーンズの著作は英国協会が独自の科学的生命を展開していくうえで役に立った。フロイトの思想は常に参照元であり、かつ着想の源であったが、英国協会の会員はフロイトの思想に盲従するつもりはなかった。英国協会は全体として、きわめて独立心に富んでいたのである。1925年にメラニー・クラインがロンドンに登場する以前から、クラインが提示することになる諸問題をめぐる関心はすでに非常に高まっていた。それは女性のセクシュアリティ、前性器期における発達的重要性、外的・環境的影響に対する生得的要因の位置づけや、それらの要因によっていかに現実の認識が形成されるのか、攻撃性や憎悪の役割はなにか、またそれらが不安や罪悪感にどう結びついているのかといったことを含む。エラ・シャープは1926年のクラインのロンドン移住を歓迎したひとりであり、クラインのうちに、英国協会にとって、また人間精神のよりよい理解にとって、偉大な資産となる人物を見ていたのである。

クラインの「子どもにおける良心の早期発達」
(The Early Development of Conscience in the

Child) [『メラニー・クライン著作集3』(誠信書房) 所収] という論文には次のような註がある。

私は「芸術作品と創造的衝動に表れた幼児の不安状況」(Infantile Anxiety Situations Reflected in a Work of Art and in the Creative Instinct) [『メラニー・クライン著作集1』(誠信書房) 所収] の中で、ひとの罪悪感と、ダメージを受けた対象を修復しようとする欲望が、昇華を展開する際の普遍のかつ根本的な一要因であると述べた。シャープ女史も「昇華と妄想の諸側面」(Certain Aspects of Sublimation and Delusion) という論文の中で同じ結論に達している。(Lorand 1933: 158¹³)

分析家としてのエラ・シャープ独自のスタイルは、1927年にロンドンでおこなわれた児童分析シンポジウムでの寄稿にも明らかである。このシンポジウムの歴史的背景は、メラニー・クラインとアナ・フロイトのあいだで、乳児期の精神生活や児童分析のテクニックや実践をめぐって緊張が高まりつつあったことに関わっている。英国精神分析協会がメラニー・クラインを歓迎したのは、単にクラインの乳児期初期を強調する思想の結果というだけではなかった。先に述べたとおり、英国協会員の多くはすでにクラインと関心を共有していたのである。クラインが開発しロンドンに輸入しようとしていたのは、ひとつのテクニックでもあった。それはきわめて独特の性格を持つテクニックであり、そこでは子供の遊びが、大人の夢や自由連想に相当するやり方で分析家によって理解され、子供と分析家とのあいだでのやりとりのすべてが転移という文脈で理解される。クラインによれば、分析家への子供の転移は解釈を必要とし、敵対的な感情や幻想も、愛情のこもった感情や幻想とまったく同じように重要なのである。エ

13 Lorand, S. (1933) *Psychoanalysis Today*, London: George Allen & Unwin.

ラ・シャープ同様、メラニー・クラインもフロイトの天才的なひらめき、すなわち分析というセッティングを取り入れ、自らそのうちに身をおいた。が、そこに子供をひとり連れ込んだのである。メラニー・クラインのテクニックは、探求・研究・治療におけるひとつの帰納法であり、これが英国協会に強く見られた経験論の伝統にうまくフィットしたわけだ。

アリックス・ストレイチーとジェイムズ・ストレイチー〔夫妻〕が交わした手紙によれば、1924年の段階では、技法をめぐる比較はメラニー・クラインとアナ・フロイトについてではなく、むしろメラニー・クラインと児童分析の初期パイオニア、ヘルミーネ・フォン・フーク＝ヘルムートについておこなわれていた。フォン・フーク＝ヘルムートについて、アリックス・ストレイチーは、考え抜かれたテクニックを持っているわけではなく「単に児童分析に手をつけてみただけ」だと評しており、それは広い意味での教育的アプローチであった。(Meisel & Kendrick 1985: 273¹⁴)

やがてアナ・フロイトが児童分析をめぐる自説を展開し『児童分析技法入門』(*Introduction to the Technique of Child Analysis*) (A. Freud 1929)で示してみると、それはメラニー・クラインとは非常に異なるアプローチになっていた。アナ・フロイトは子供のポジティブな反応を促し、子供が両親に対して持つ強い愛着が転移の進行を容認しないだろうと考え、遊びを夢や自由連想に相当するものとする理解は持たず、子供に対して解釈をおこなう立場からというよりは、むしろ教育的・説明的なかたちで語りかけるのだった。

したがって1927年の児童分析シンポジウムは、当時の分析家たちによる児童分析に関する考えを明確にしようとする試みだったわけである。エラ・シャープは、バーバラ・ロウ、ジョーン・リヴィエール、エドワード・グローヴァー、アーネスト・ジョーンズ、ニーナ・サールらと並んで寄稿している。が、ここでの私の目的は、このシンポジウムでの議論の詳細を概括することではなく、エ

ラ・シャープの論文から、シャープの臨床実践とテクニックを伝えるものを抜き出すことだ。

シャープは退学になりかけている15歳の少女を描いている。この少女は露骨な性表現を含む一通の手紙によって、学校関係者と両親とともに恐怖に陥れたのである。少女はエラ・シャープのもとに相談に訪れるが、問題の手紙には触れず、ボーイフレンドから教わる前にすでに性的知識を持っていたことは否定する。エラ・シャープは少女の治療を引き受けた。シャープは少女が数日に渡って皮相的な話を続け、そのあいだずっと手遊びしていた状況を描写する。シャープはリスク覚悟で自慰に関わる解釈をするが、少女は非常に強く反駁する。その翌日、少女は分析家がどんなことを訊いてくるのか母親に話した、母親は一刻も早く分析家との面会を手配しようと手紙を送ってくるだろうと言う。エラ・シャープはそこで自分の内になにが起こったか、次のように記すのだ。

このセッションのあと、私は落ち着かない感じがしはじめました。彼女の象徴的自慰について、あんなにはっきり、こんなに早くに解釈したことが正しかったのだろうか、自分の分別を疑っていることに私は気づきました。この落ち着かなさが、自分の心を探ってみさせることになったのです。私は自分がファンタジーの中で母親の訪問を予期しているのに気づきました。少女は私の自慰という解釈を拒否しています。では私はどうやって自分を正当化すればよいのだろうか？ あの子がそのことを母親に話したとしたら、母親なら当然、娘の潔白を信じるだろうしと。そこで私は、大人の分析にあたっては一度も生じたことのない波紋が広がるのを感じました。両親からの非難という、この外的状況にあって私に向けられることになるかもしれな

14 Meisel, M., & Kendrick, W. (1985) *The Letters of James and Alix Strachey 1924-1925*, New York: Basic Books.

いと私が想像するものが、私自身の幼児期の超自我による非難であることの認識に至りました。また、大人との症例では、[分析に対する] 抵抗 (resistance) がどこにあるのか、その抵抗がなにを防衛しようとしているのかを追跡する作業に没頭していて経験したことのない反応を、あるときこの少女の頑固さに対してしているのに気づきました。私はこう考えている自分に気づいたのです。「あなたがここに来なきゃならなくなったのは、私のせいではないのよ。あなたはあの手紙を書くべきではなかった。それなら、あなたは私のところに来ないですんでいたでしょうよ!!!」と。ここで私は、子供の性的関心を非難する両親と同一化している状態、言い換えれば、自身を非難する幼児期の超自我のなすがままになっているという尻尾をつかまれたわけです。(Sharpe 1927: 382¹⁵; 1950:5-6¹⁶)

シャープのこの少女との作業について論ずる中で、オラシオ・エチュゴワヤン (1991) は、逆転移理論へのエラ・シャープによる初期の貢献は完全に看過されてしまったかに見える」と指摘している。「この 15 歳の少女の治療において、シャープの論理的理由づけは完全に自分の (逆転移) 反応に向かっている。エラ・シャープが見せた患者に対する自身の反応の自己分析は、逆転移による不安を精神的に究明するひとつのモデルである」(Etchegoyen 1991: 263¹⁷) と記し、さらにシャープの臨床場面における分析家自身の使い方は、はるかに時代の先を行っていたと、シャープの分析家としての才能に光をあてている。ドナルド・メルツァー (1984) も、言語と夢の分野におけるシャープの思考の独創性と、それが現在いかに広く忘れ去られているかを指摘する。

おそらく精神分析家として唯一、夢をめぐって多くを記し、静かにフロイトと異なる見解を抱いていたのがエラ・シャープである。そ

れがシャープの著書『ドリーム・アナリシス』において、いとも静かにやってのけられたのは間違いなく、ほとんど注意を引くこともなかった。夢理論へのシャープの創造性に富む貢献の核をなしているのは、夢が叙情詩の「詩的語法 poetic diction」とシャープが呼ぶものを使っているという証拠を大量に示したことである。これによってシャープは、夢が、直喩、隠喩、頭韻、擬音など多くの方策を、すなわち詩的言語がその喚起力を獲得するために用いる多くの方策を用いていることを示したのである。(Meltzer 1984: 27¹⁸)

しかしエラ・シャープの精神分析への貢献とスタイルについての最も簡明な評価は、シャープに分析を受けたマスッド・カーンによるものだろう。1978 年の『ドリーム・アナリシス』再版にあたっての序文で、カーンは「地味ながらも自分はフロイトの確定的相続人であると知るに足る確信を抱き、かつ自身の技量に絶対の自信を持ち、しかし同時に無名であったひとがおそらく三人いるが、そのひとり」がシャープであったと記しているのだ (Sharpe 1978: 9-10¹⁹)。

現著者註

1 シャープの著作は「エラ・フリーマン・シャープ Ella Freeman Sharpe」という名で書かれているが、通常エラ・シャープと称されるので、本書では一貫して短い方を採用した。

2 丸括弧内のページ番号は本書再録のシャープの

15 Sharpe, E., F. (1927) 'Contribution to symposium on child analysis', *International Journal of Psychoanalysis* 8: 380-384.

16 Sharpe, E. F. (1950) *Collected Papers of Psychoanalysis*, London: Hogarth.

17 Etchegoyen, H. (1991) *The Fundamentals of Psychoanalytic Technique*, London: Karnac.

18 Meltzer, D. (1984) *Dream Life*, Perthshire: Clunie Press.

19 Sharpe, E. F. (1978 [1937a]) *Dream Analysis*, (reprinted with an introduction by M. Khan) London: Hogarth.

論文の参照箇所。

3 英語は厄介なことに中性三人称を持たない。本書では「she/he」、「him/her」等の表記は使わず慣例に従う。任意の人物を指して「he」が用いられる場合、その性別は純粋に文法的なものである。

4 第2章で、シャープの英国精神分析協会での大論争 (King & Steiner 1991) への貢献をめぐってさらに詳しく検討を加え、シャープが接近戦で対峙し続ける主役たちのあいだにいくらかのスペースを作り出そうとしていた様子を見ることにする。シャープはいずれの陣営とも手を結ぶ必要がなく、どちらとも議論を交わし双方から学ぶことができた。

5 ジェイムズ・ストレイチー (在ロンドン) と妻アリックス (1925年のメラニー・クラインの訪英準備のため在ベルリン) の書簡が明かすとおり、エラ・シャープの面接室がメラニー・クラインの講義会場として使われることになっていた。ところが講義への関心が予想以上に高く、もっと大きな会場が必要になり、カーリン&エイドリアン・スティーブンの家が使われることになったのである。(Meisel & Kendrick 1985: 273²⁰; Grosskurth 1986: 135-7²¹ 参照)

6 私は別の箇所 (Whelan 1999²²) で、シャープが言語と夢に関する考えを進めていく際にオート・ランクの影響を受けており、ことに1914年版の [フロイトの] 『夢判断／夢解釈』に挿入され、のちにフロイトとランクが袂を分かつと削除された、ランクによる夢と詩をめぐる章の影響が強いと論じている。

20 Meisel, M., & Kendrick, W. (1985) *The Letters of James and Alix Strachey 1924-1925*, New York: Basic Books.

21 Grosskurth, P. (1986) 'Six letters of Sigmund Freud and Sándor Ferenczi on the inter-relationship of psychoanalytic theory and technique', *International Review of Psycho-Analysis* 13: 259-277)

22 Whelan, M. (1999) 'Freud, Rank and *The Interpretation of Dreams*', *Bulletin of the British Psycho-Analytical Society* 35, 2: 39-41/

【翻訳】

『ドリーム・アナリシス』

第7章 精神的・身体的危機において生じる夢の例

エラ・シャープ

Ella Freeman Sharpe, *Illustrations of Dreams Occurring During Psychical and Physical Crises, Dream Analysis*, Karnac, London, 1988 (First Published 1937), Chapter VII.

- 1 分析開始時の患者の精神状態を示す夢
- 2 精神的破綻を予告する夢
- 3 「火」の夢とその重要性
- 4 身体的破綻を予告する夢
- 5 精神的リスクマネジメントの手法を示す夢

この章は、大小さまざまな精神的危機の中で患者によって語られた特徴ある夢について考えることに使おうと思います。そういう夢は象徴的重要性において典型的なものですから、臨床家になろうとするひとにとって価値があるかもしれません。

第1章で最初にお話しした「音楽」の夢は、ある患者が分析初期に語ったものです [訳注：第1章 p. 20 より引用翻訳：私はコンサート会場にいました。が、そのコンサートは授乳のようでもありました。私にはなぜかその音楽が目の前を絵のように通っていくのが見えました。その音楽絵 the music pictures は、夜の船のように通っていきました。絵には2種類あって、白い山々で柔らかくまるまるとした頂上のものが何枚か、あとに続いたほかの絵数枚は、高くて尖った山々のものでした]。このとき患者は現実における死別のショックに苦しんでいました。夜の夢の中での満足は、実生活における荒廃とは極端な対照をなしていました。この患者は分析セッション中しばしばクッションの角をしゃぶりつつ眠りに落ちていました。その後の分析で非常に重篤な転換ヒステリーが明らかになりましたが、それは幼い時期から表面化していたものでした。

「音楽」の夢の私の見立ては、神経症の重さや、

分析中に患者が受けたさらなる外的トラウマに照らしてみても、この患者のうちには、必要とならば、内的・外的要因によるストレスに患者の精神が耐えるだろうというある程度の保証があることを示しているというものです。夢の中では、満足の根源への幻覚的回帰が見られ、それはクッションをしゃぶることでもドラマ化されていました。これは快感の夢であり、夢の中では本能が正常なあり方で口唇期レベルの欲望の対象へと向けられています。過度の不安、深い抑鬱、自殺ファンタジー、身体的な病といった時期をこの患者はすべて経ることになります。口唇的な満足へと退行するこの夢を、精神的健康を再度得ることを約束するものと見做すにあたって私が考慮したのは、最大のストレスに晒されたときでも、この患者は普段の生活での日課や、専門職としての仕事をある程度以上放棄することがなかったという事実です。

分析開始当初は、眠りに落ちることやクッションをしゃぶること自体が、まさに幼児期の指しゃぶりの時期に相当するものとして、患者にとって治癒の過程を開始する方法だったのです。これに対する分析家側の不干渉、つまりこの局面がそのまま展開するのを許したことは、深い陽性転移の成立を意味しました。この時期にも、自殺傾向は、ゆるやかかつ無害なたちで、私のいるところで眠ることによって示されていたのです。ですから、こうした傾向がより危険なたちで展開することに対する安全装置として、不干渉は妥当な策だったわけです。

ある患者は数週間のうちに何度も自分が非常に幼い子供で乳母車の中にいて、きれいな海辺に沿って、母親に乳母車で押されて進んでいく夢を見ました。

この夢も「音楽」の夢と同じく、偽装されていない願望であることが明らかです。願望を歪曲しようとするさまざまな心的メカニズムの側には一切の努力が見られず、対立願望 (counter-wish) が表現されていません。ひとつの願望に対して抵抗しようとする心的な力が最小になっているのです。この患者の場合、この夢は、通常の生活と仕

事を続けようとする努力が辛うじて保たれていた危機的な時期に生じました。患者が通過しようとしていた心的危機は、分析の一時期の頂点にあたり、そのあいだに固定的な妄想が消失したという時期でした。それまで患者は、結晶化した妄想によって一定の正常性を維持していましたし、そのおかげで仕事も維持できていたのです。その努力はストレスに満ちたものでしたけれども。ですから妄想的信念が弱まったことで、心的エネルギーの内的再配分が必要になりました。それまでは妄想への心的エネルギーの備給によって対処されていたからです。その妄想の中で、彼女はひとりの男性にさまざまな攻撃的性行為を投射していました。この妄想自体、抑圧され、切り離されていた子供時代の性的トラウマの回帰の一端だったのです。この幼児期のトラウマに関する分析作業の結果、母親への敵意をとまなう真正のエディプス願望を出してることが可能になりました。それが解放されるとともに、子供時代の行為やファンタジーの記憶も戻ってきて、攻撃的ファンタジーがいかに強かったかというだけでなく、ライバルになった赤ん坊である妹を傷つけようとする実際の試みも強かったことを証明しました。先にお話した夢は、患者が怖れていた攻撃的衝動からの精神的休息を表しています。一人っ子である夢を見ることで、患者は自身を嫉妬する必要のない立場に置き、したがって攻撃的衝動を怖れる必要もないわけです。彼女はさらに母親に面倒を見られ守られていますから安全です。この夢は母親との和解という願望を表すものと見ることもできるでしょう。この夢を予後という観点から好ましいものと見做すにあたって、私はこの夢の意味に加えて、以下のデータを考慮しています。まず、この患者が固定的妄想という手段で外的世界とコンタクトを維持してきたこと。次に、その妄想自体が徐々に消える一方で、同時に、愛憎をめぐる活発な衝動が、適切なひとたちと結びついて、かつ具体的に想起された子供時代の諸状況と結びついて明るみに出てきたこと。さらに、そこで可能になった諸々の昇華 (sublimations) が、母親に対して

修復的なものであるというだけでなく、それらの昇華自体が、根本的な本能の満足に向けての象徴的回路を提供しているということです。この夢はもう一度子供になりたいという非常に強い願望を表している一方で、それにも拘らず、今、私が述べた詳細を考慮すると、幸先の良い夢と見做さるでしょう。

次に御紹介する夢は危機を予告するものです。この夢を見た女性は、当時、専門職としてのキャリアの中で複数のつらい仕事をかかえていました。それが、のちに明らかになった心的葛藤に加えて、彼女の現実的な体力にも大変な負担を強いていたのです。夢を見た段階では、身体的な病気については意識されていませんでした。彼女は倦怠感と仕事への関心がいくらか欠けているのを感じていて、休みをとる必要はあるものの、そのあとには関心も戻ってくるだろうと思っていたのです。その夢はこうです。私は時間を見ようとして時計をとりあげ、盤面が細長い紙切れですっかり覆われてしまっていて何時だか見られないのに気づきました。この夢の少し後で、一週間の不眠ののち、患者は専門家としての仕事を諦めて長い休暇をとらざるをえなくなり、そのあいだに分析を受け、精神神経症が明らかになったのでした。

私はこの夢を、身体的かつ精神的破綻を予告する夢として引用しています。この夢は、分析治療中、患者が快方に向かう途上で再度現れました。そちらのバージョンはこうです。私は何時だか見たくて自分の時計を見ようと振り返りましたが、時計はそこにはありませんでした。それから時計を棚に置いたのを思い出しました。棚からおろしてみると、盤面はまったくきれいで時間を見ることができました。

ここでは、この夢の具体的な比喩表現を解釈しようとはしません。今はこれに続いて破綻を生じたという夢全体としての意味に注目していただきたいのです。もしもこの夢が、これを見た女性によって、そういう知識のあるひとに語られていれば、発疹の出ているひとに対して、すぐ医者にみてもらおうようアドバイスするのと同じ確信をもっ

て、すぐ精神的な援助を求めるようにとアドバイスされていたかもしれません。そこで精神的ストレスがいくらかなりともやわらいでいれば、完全な破綻をまぬがれた可能性もあります。

広い意味で興味深い次の「危機」の夢は、精神的難聴を発症して学校をやめなくてはならなくなった15歳の少女患者が語ったものです。聾に至れば将来の見通しは暗いものでしかないと彼女は大変不幸な状態に陥っていました。問題の夢は、すべての列車が静止した駅を描写したものでした。入ってくる列車もなければ、出て行く列車もありません。エンジンはどれもすでに機能を止めていました。結果的にいかなる音も聞かれませんでした。

この患者の分析は成功しました。彼女の精神の形成作業は15年に渡って続き、今では幸せな既婚女性になっています。分析家の視点からこの夢を見ると、これは役に立つひとつの夢だということになります。その理由は、精神的難聴の意味に関するひとつの直接の手がかりを与えてくれる夢だからです。聴かないということは、魔術的にエンジンの停止を引き起こすという意味を持っているのです。その後の患者の分析はすべて、この夢の分析と見てもよいものでした。分析のテクニックによって、無意識的精神が、エンジンという象徴に連動する意味と、魔術的にエンジン停止を引き起こす理由とを明かしたとき、患者は聴力を回復しました。

では次に、三つの火の夢を御紹介します。それぞれ三人の患者が語ったものです。

(a) 「私は燃えている家を見ました。家には女性と彼女の子供たちがいました。私はひとりの男性が彼らを助けに入っていくのを見ましたが、男性はそのまま出てきませんでしたから、一緒に焼死したはずです」

(b) 「私のいる家が火事になりました。私はものすごく心配になって逃げるつもりでしたが、まず私のいちばん大事なものの、描いている途中の絵の

ことを思い出しました。絵はまだ完成しておらず、私はそれを完成させたかったのです。ですから私はアトリエに行き、絵をイーゼルからおろし、それから急いで燃えている家を出ました」

(c) 「私は自分の服に火を着け、その瞬間に目が覚めました」

三つの夢は、いずれも精神的な危機に関わっていました。顕在内容 (manifest content) だけでも考慮に値するものです。

いずれの患者も、母親に対して感じている攻撃的衝動によって引き起こされた精神的ストレスを通過しようとしているところでした。攻撃的態度の理由は、母親が父親によって子供を得たという事実が引き起こす幼児期の嫉妬です。第一の夢では、非常にシンプルに、母親と子供が焼け死に、最後は自ら助けにいった父親自身も焼死すると語られています。さて、この夢は、夢を見た患者に意識のうえではまったく苦痛をもたらしていません。第二の夢を語った患者の経験した苦痛とは対照的です。その理由の一端は、投射 (projection) のメカニズムです。それはこの夢においては、精神の内部でドラマが演じられるにあたって、「私」という自我が見物人であることによって示されています。この自我は関与していないのです。患者の精神がどこまでストレスに耐えうるか見定めるうえで、この種の夢は分析家にとって役に立ちます。この患者はストレスが大きくなりすぎたときには、自分でなにか引き起こすというより、外的に生じた事故や災害に巻き込まれる可能性が高いタイプです。たとえばこの患者は子供の頃、不注意に通りに飛び出して車にはねられたことがありました。

攻撃衝動への対処という問題は、第二の夢の患者の前にも立ちはだかつていました。第二の夢は、第一の患者の夢よりもはるかに強く不安に結びついていました。こちらの「自我 ego」は、はるかに強く関与しているのです。というのも夢の中で、患者は燃える家の中にいますから。投射の

メカニズムが第一の夢より弱いのです。第一の夢の家は、母親の身体とその中にいる子供を象徴していました。そして夢を見たひとは、それとは別のものとして存在しています。第二の夢でも、夢を見たひとがその中にいる家は、母親の身体を象徴していますが、第一の夢とは対照的に、夢を見たひとと母親の身体の中において、一方への危機は母子双方を危険にさらすわけです。しかし、リビドーの方が憎しみという衝動よりも強いのです。救いたいという願望の方が破壊したいという欲望よりも強いのです。したがってこう結論づけることもできるでしょう。第二の患者は、苦痛な不安にも拘らず精神的均衡を保つだろうし、攻撃的衝動についてもリビドー的衝動についても夢の中で昇華が与えられていると。なお、この患者は画家でした。

第三の夢は、実際に身体に危害を加えることになりかねない精神的危機を示しています。投射のメカニズムはこの夢には存在しません。ですから「家が火事になる」のではなく「自分に火をつけた」ということになるのです。この自我は攻撃的願望のなすがままです。この夢と同種のものは、自傷の試みや、極端な場合、自殺の試みの前触れになることもあれば、ならないこともあります。でもこのような夢が出てきたら、分析家はことの重さを見きわめなくてはなりません。

そういうときに考慮すべき点を以下にいくつかあげておきましょう。分析家は、患者の自我の発達の強さを見積もる必要があります。また、過去の感情的危機にあたって患者がとった特徴的行動も、ひとつの指標になるでしょう。そういうときの特徴的対処法が逃避であったのか、仕事と人間関係からの離脱であったのか。もうひとつ、分析そのものに関して指標になりうるのは、患者のムードが率直なものから、なにか計画を抱いているかのように秘密主義的なものへと変わることです。またひとつ、患者の生活の側面から不測の事態を推し量るにあたって役に立つのが、現実への関わりをめぐる全体的な状況です。仕事に対する関心が弱まっていたり、直接的・間接的なリビ

ドー的満足が得られていなかったり、ひととの接触が少なく薄くなってきている、あるいはただ苛立ちを引き起こすものになりつつある、といったことがあるようなら、分析家はこの夢を深刻な意味を持つものと捉えることになるでしょう。それでは、まとめておきましょう。このような夢を見る患者が十分に統合された自我を持っていない場合、また、過去に生じた感情的な動揺が現実の仕事や友人関係の断絶や突然の逃避を招いている場合、そして、夢を見た時点での現実の全体像がリビドー的満足に失敗しているとか、はけ口のない不明瞭なままの攻撃性を示している場合、もしも患者がじっと考え込んで近づきえない状態になったら、分析家としては、なにか自己破壊を試みる可能性があると考えるのが妥当でしょう。そのときは現在の危機に対して非常手段がとられねばならず、危険が去るまでそれを続ける必要があります。

次の夢が興味深いのは身体的な病気の前触れだったという点です。この夢を見たひとは非常に身体がだるかったにも拘らず、具体的な身体症状がなかったために医者にかかることをためらったまま、しんどい仕事を続けていました。彼女は全力で窓枠にしがみついていたのですが、ついに力つきて地面に墜落しましたという夢を見ます。夢の二日後、この女性は意識を失って地面に崩れ落ちました。記憶にあるかぎり初めての失神で、医者が呼ばれ、少し前から膀胱の感染症に罹っていたはずだとわかりました。患者は回復するまでに三か月を要しました。

もうひとつ、今度は小さな危機にあたっての心的統御を示す夢を御紹介しましょう。このケースでは、患者はかなりの分析治療経験を持っていました。そしてこの時期、攻撃性をめぐる精神的ストレスは、患者の夢の中ではなによりも頻繁に荒れ狂う海として象徴化されていました。荒れ狂う海はいつも彼女を追ってきて、溺れさせ、呑み込もうと脅かすのです。患者が次の夢を見たのは、父親代理にあたっていた人物が亡くなったときです。彼女は深い水の中にいました。が、水がとて

も塩からいので押し上げられ、だから溺れる怖れはないのだとわかりましたという夢を見ます。「塩水 salt water」に対してはただちに「塩の涙 salt tears」という連想が浮かび、次の瞬間、患者は詩の一節を引きます。

愛よ、悲しみの手を掴め、共に溺れぬために。

Let Love clasp Grief, lest both be drowned.

[入江直祐訳、テニスン「イン・メモリアム」より]

この精神状態であれば患者の自我を脅かすものはありません。また、私の別の患者でこの種の危機をうまく乗り越えたひとは、個人的喪失に際してこう記しました。

私の悲しみを持ち去らないでくれ。ならば
救いの手に煩わされずに、まだ泣けるだろう。

涙を流せるうちは
まだ愛は死んでいない。

【以上翻訳。モーリス・ウィーラン氏と
カルナック社より翻訳権取得】

[訳者註：シャープの文章は、全体に語順が形式的な平明さではなく意味優先で、文が込み入ることを避けようとしていない。また、講義形式だが段落が長くにも及ぶ。シャープは見た目の段落長にこだわらず、複雑な「危機」は自分の思考のスパンを長くして語る。ジョーンズの指摘した「独特の接近度」は、文体と内容の関係についても言え、ウィーランが言う「正面性」、「虚心坦懐」は文体上も明らかだ。精神分析的には、文体とは身体である。形骸に墮さないこの『思考の女主人 *Mistress of Her Own Thoughts*』（ついでだが mistress には女性教員・校長の意味もあり、このタイトルはシャープの転身を踏まえている）は、マスメディア的に標準化された比較的段落の短い文章に慣れた現代の読者への便宜として翻訳で段落を分けるといったことを控えさせる。]

蛇足になるが、以上に訳出した『ドリーム・アナリシス』第7章では、パターン化した「象徴」、たとえば「家」を女性の身体と見るといったことが当然のごとく行われている。しかし、この種の象徴は、フロイト的な夢分析の中で、夢による語り唐突に普遍的表象に結びつけられるように見えるという意味で、少なからず奇異に映る部分である。精神分析を科学として立ち上げることに腐心したフロイトにとって、いくら文学が好きだったとしても、神話・民話・ことわざなどと多数の共通項を持ち、自在に夢の中に登場する「象徴」は、理論として扱いやすいものではなかった。しかし実際に夢を解釈した経験は、象徴化が夢の作業／夢工作／夢の仕事として除外できない頻度で用いられることをフロイトに告げており、フロイトはそれを無視しなかった。そこをどう見るかは、フロイトの夢理論を受容しうるか否かを分けかねないポイントである。

『夢判断／夢解釈』中の象徴に関する記載はそれほどまとまっていないが、特に身体をめぐる定型的象徴が表れやすいことは示されている。そしてシャープは、『ドリーム・アナリシス』第2章で、象徴を類型的象徴と個人的象徴に分けて考えている。たとえば個人的象徴の例として、職工の使う機と梭があげられる。大きな四角い機がベッドを、飛び交う梭はペニスを、糸は精液を、糸から布を作り出すことは子供を象徴していると。こう書くといかにもフロイトだと辟易されそうだが、この解釈には、生後1歳までに田舎の大叔母の家に連れていかれ四柱式ベッドで両親と一緒に寝たことがあり、その後、その地方で何度も機織りを見ており、ある程度大きくなってから、素早く行き交う梭に魅入った記憶を本人が持っていて語っている、だからこそ、機に向かってかがみ込んで梭を行き来させる男が、乳児として四柱式ベッドで目撃したシーンの意味を幻想の中で担いうるという背景がある。シャープは、象徴化されるのは根本的な基本要素としての自らの存在、すなわち身体、生き死に、生殖だと明言している。それゆえ、自らの存在が危機に晒された状

況にあって見る夢を扱った第7章には象徴が続出し、一見、浅薄な象徴的解釈に依存しているもとられかねない。しかし夢分析を臨床的に用いる中で、シャープは幼児期の（特に身体をめぐる）強い興奮や感動が個人的象徴を生み出す契機になること、そうした象徴を生み出すパターンが、感動を言葉で伝えるアートとしての「詩的語法」のそれに一致していることを示したうえで象徴的解釈を用いているのである。

非科学的と見えかねない象徴的解釈を、フロイトは実践上の有効性から分析のテクニックとして切り捨てず、シャープは分析のテクニックとしてそれを用いる中で言葉をめぐるアートとしての修辞法との相同性を見いだした。のちにラカンが無意識は言語のように構造化されていると言い得たのは、こうした積み重ねのうえに立ってのことである。ウィーランの紹介で引かれている「精神分析は、そのテクニックがアートであることをやめたとき、生きた科学であることもやめてしまう」というシャープの言葉の重みを第7章から少しでも感じていただければ、紹介者としては嬉しい。